

聖書:テサロニケ人への手紙第二 1章8~12節

説教:イエスの名があがめられるとき

はじめに

パウロがギリシャの港町であるテサロニケに立ち寄って福音を語ったとき、大勢の人々が救われずに教会が建てられました。ところがそれを見ていたユダヤ人たちがパウロをねたんで迫害したことで、パウロは町を離れなければならなくなり、まだ救われたばかりの人々が集まる教会に経験のある指導者が不在となりました。それに加えて、パウロを迫害したユダヤ人は次に教会の人々を迫害し始めます。教会の人々は厳しい迫害に耐えながら熱心に主の再臨の日を待ち望み、その熱心は地域の人たちにも知れ渡るくらいでした。しかし深刻な問題も起きました。一部の人たちが極端な方向に走り、まるで主の日は明日にでも来るようなことを言い、なかには働くことをやめて人の世話をばかりなっている兄弟もいる。このことを聞いたパウロは教会を励まし、戒めるために二通の手紙を書きました。今朝開いているのは、そのうちの二通目の冒頭部分にあたります。

今回は、もし私たちが目の前にある苦しみに向き合いながら、忍耐して信仰を保っているならば、世の人々に対して「主のさばきはかならずあること」を証しとなる。そのようなことをお話しました。

ではその主のさばきとはどのようなものなのか。期待して待つべき価値が本当にあるのか。そのことを見てまいります。

1 神

1) さばかないのが本当の神なのか

8節以降は7節からの続きとして書かれていますので、7節の後半から9節までを読みます。「このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に罰を与えられます。そのような者たちは、永遠の滅びという刑罰を受け、主の御前から、そして、その御力の栄光から退けられることとなります。」

主イエスが来られる日、それは「さばきの日」とも呼ばれるときですが、その日、主は主イエスの福音に従わない人々に罰を与える、と書かれています。

神が罪をさばくことは、聖書の最初から最後まで一貫している原則ですが、初めて聞く方には恐ろしく感じられるかも知れません。私も最初にこれを聞いたときは、違和感を覚えました。神とは、泣いている子どもを「大丈夫だから安心しなさい」と言ってやさしく抱きかかえてくれる母親のようなもの。そんなふうには想像していたからです。おそらく多くの日本人はそんな神観を持っている。なかには、神が罪を厳しくさばくことに強い拒否反応を示す方がいて、キリスト教の神は心が狭く寛容でないから戦争が起きる。でも日本では、八百万の神々がいるし、仏教の仏様もいて、みな平和に共存していてこちらが優れている。そんなふうには言います。

2) 人の良心さえあれば

一見説得力があるような意見に聞こえますが、でも仮に神が罪をさばかないとしたらどうなるのでしょうか。突き詰めれば何をしてもよいということにならないでしょうか。悪いことをしても、人に迷惑をかけてもよいということにならないのか。もちろん、反論があるでしょう。人には良心というものがある。また先人たちから伝えられている生きる知恵、あるいは道徳というものもあるので多少問題はあっても平和を築くことができる。

この意見はある程度あっています。日本には憲法というものがあって、そこには神のさばきのこととは一言も書かれていません。それでも国としてきちんと成り立っています。犯罪を犯した人は法律によってさばかれ、罰を受ける。そのような制度があるので、私たちは安心して日々暮らせます。それは否定しません。

2) もしも、神のさばきがないのなら

1) 愛する者を取り戻すことができない

では、神のさばきはなくても、人間が作った法律さえきちんと整えられていたらこの世は平和になるのでしょうか。

例えば、交通事故で愛する家族を失うというケースを考えてみましょう。事故を起こした方は法律によってさばかれます。亡くなった方の家族には賠償金が支払われます。すべて法律に従って進められる。では、亡くなった当の本人を生きて戻すことができるのか。あたり前のことですが、どんな

にすばらしい法律でもそれはできませんから、それはあきらめるしかない。人が人をさばくことの限界がここにあります。

神が世をさばかないとすれば、家族を亡くした方はただ悲しむしかない。どこにも希望を持つことができません。

2) 罪を悔いても

次に同じ交通事故のケースで、今度は自分が加害者の立場になったとしましょう。相手の家族の方は泣きながら訴えるでしょう。「私の夫を返して。わたしの子どもを返して。」でも、どんなに自分が謝罪しても、たとえ多額のお金を払っても亡くなった方は返ってきません。どんなに自分がしたことを悔いても、起こしたことは元に戻せない。相手の家族の方の叫び声を一生背負い続けるしかない。

神がさばきをなさらないというのなら、家族を亡くした方もそうですが、事故を起こした方もどんなに悔いたとしても希望はありません。

3) 未来に希望がない

よく、未来に希望を持ってがんばりなさいと言われるのを聞きます。でもがんばってもどうすることもできないことがあります。思いがけない事故に遭ったり、病にかかったり、あるいは自分の罪で人を苦しめたり、予想外のことが起きて希望を失うことがあります。たとえ何も起きなかったとしても、人は結局最期は死で終わります。そんな人生に何か意味があるのか。それでも希望はあると言えるのか。私は若い頃そのことで悩んでいました。どこかに答えがあるかと思って探し続けたのですが、どこにも見つかりませんでした。

3 真の希望

1) その日

テサロニケ教会はキリスト者であるということに激しい迫害にあっていました。地域の人たちから冷たい視線を向けられ、厳しいことばを投げつけられ、差別され、交わりから遠ざけられています。そんな教会の人たちを励ますためにパウロは10節でこう言っています。「その日に主イエスは来て、ご自分の聖徒たちの間であがめられ、信じたすべての者たちの間で感嘆の的となられます。そうです、あなたがたに対する私たちの証しを、あなたがたは信じたのです。」

神は正しい方であるから、あなたがたを苦しめるものには必ず報いとして苦しみを与え、苦しめられているあなたがたには、報いとして安息を与え

ます。主イエスが燃える炎の中から来られる、その日にこれらのさばきがなされます。これが私たちの希望です。

2) イエスはあがめられる

その日に何が起こるかについては、10節で二つのことが挙げられています。その一つ目、主イエスは、ご自分の聖徒の間であがめられる。イエス・キリストと呼ばれる神のひとり子が来られるのですから、人々にあがめられるのは当然。別の言い方をすれば、人々が主をあがめる、あるいは喜ぶのは当然のことと思うかもしれません。でもすべての人が喜ぶのでしょうか。主イエスの福音に従わない人々に罰を与えるのですから、そのような人たちにとって、主が来られる日はわざわいの日です。イエスも世の終わりの時について、マタイの福音書13章41、42節でこう言っています。「人の子は御使いたちを遣わします。彼らは、すべてのつまずきと、不法を行う者たちを御国から取り集めて、火の燃える炉の中に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。」

このように不法を行う者たちにはわざわいの日であっても、聖徒たち、すなわち主イエスを信じる人たちにとっては喜びの日となる。それが10節に書かれていることの一つ目。

3) イエスは感嘆の的となる（驚く）

続いて二つ目。「信じた者たちの間で感嘆の的となられます。」「感嘆の的」と言うと、例えばコンサートですばらしい演奏が終わったときに聴衆が席から立ち上がって「ブラボー」と叫んで拍手するイメージがあります。でもここで使われている言葉はそのような意味はなくて、むしろ「とまどう」とか「思いもしなかったことを見たり聞いたりしてびっくりする」、そんな意味です。

その日イエスが来られたときに驚くのは、信じている者たちです。なぜ驚くのでしょうか。実際にイエスを目の当たりにしたら誰でも驚くはずだ、ということでしょうか。でもこの「驚く」ということばに、「とまどう」という意味があることにこだわります。私たちはイエスにはまだ会ったことはなくても、聖書を通して知っていますから「とまどう」ことはないはずです。それが、「とまどって驚く」と書かれているのですから、驚くような何かがあるということなのです。

あらかじめ申し上げますが、とまどって驚くと言うときに二つの可能性がある。予想もしていなかった良いことを見て驚くのか、それとも予想もし

ていなかった悪いことを見て驚くのか。どちらかです。

先ほど見たように、主イエスはご自分の聖徒たちの間であがめられるのですから、もちろん「予想もしていなかった良いことを見て驚く」ということになる。いったいそれは为什么呢。

二つあります。一つ目はだれが救われるかについてです。

主の再臨の日、主のさばきの日、恵みの信仰によって救われている私たちはその日が来ることをまったく恐れることはありません。でもある方には不安かもしれません。厳しい迫害や苦しみが続けば、信じるのをやめようと思うことがあります。本当に神はいるのかと、疑うこともするでしょう。神はこんなに困っていても助けてくれない、大嘘つきだとののしることもあるかもしれない。

あるいは、私はいつも罪深いことを考えたり、繰り返している、こんな私は救われないのではないかと悲しむ方もいるでしょう。ほかの人のことを見たら、信仰と呼べるものは私にはありませんと言う方もいる。そんな方たちにとって、主のさばきの日、自分がどうなるかまったく確信が持てないでしょう。

でも聖書に何と書いてあるか。まったく予想もしていなかったことを見てあなたがたは驚き、小躍りして喜ぶことになる。もちろん誰が救われ、誰が救われないと、私たちにはわからない。でもその日、イエスの手だけでは間に合わない。人の子が御使いたちを遣わさなければ集められないくらい多くの人たちが救われていく。人数から言えば、驚くほどの人たちが救われる。

人数だけではない。それが二つ目です。私たちは、主の日にはこうなるようにと祈り願っています。それで実際主の日に、私たちは祈っていたことが実現するのを見ることになるのですが、そのとき、願っていた以上に多くの報いが与えられるのを見ることになる。それはとまどうくらいの豊かさである。それが「驚嘆の的になる」に込められている意味です。

主イエスが十字架においてご自身のいのちを捨ててください、この救いを受け取りなさいと、手を差し伸べてくださいました。その恵みを覚えて御名をあがめます。